大正期における田村剛のモダンデザイン思考と庭園改善運動

Tsuyoshi TAMURA's Thought of Modern Design and the Garden's Improvement Movement in Taisho Period

市川 秀和*

Hidekazu ICHIKAWA

摘要：明治の欧化政策によって日本庭園の伝統様式は、「洋風」に対する「和風」として相対的に再認識された。明治・大正期の都市公園や上流邸宅庭園の設計には、「洋風」あるいは「和洋折衷」が専ら好まれ、さらに和風の新創造としての「近代和風」が、近世から継承された高い造園技術に支えられて試みられた。また一方で、近代化の進む中央都市へ新生活を求めて集まった「一般大衆」の誕生は、全く斬新なモダンデザインによる住まい(住宅・庭園)の可能性を開かせた。そこでかかる時代状況を反映した田村剛のモダンデザイン思考が、大正9年発足の生活改善同盟会を発端にして庭園改善運動へと結実していく事態を追跡して再評価を試みる。

1. はじめに：本研究の射程

日本近代の造園史をめぐる従来の主要研究は、都市公園や自然公園の成立過程ならびに上流邸宅庭園にみる近代和風の特色、さらに日本と欧米の伝統的庭園様式の比較等を考察対象に扱ってきたと概ね受け取れる。また最近年では、現代の多様な環境問題も反映して、戦前の郷土風景保存や森林風景美等の史的論議、そして詩歌や紀行文などに基づく風景論研究等が徐々に活発になってきた。こうした既存研究の成果から、日本近代造園史において如何なる視点で何が問われてきたのかを個々に理解されるとともに、日本特有の「造園のモダンティとは何か」という総括的な本質論議も当然浮かび上がってくる。そこで「造園は美を主目的として造られる」(田村剛)¹⁾ という視座が、日本近代造園史上で繰り返されてきた経緯を振り返るとき、かかる本質論議へのアプローチとして、まず「日本近代における造園のモダンデザインとは何か」という問いの可能性に着目して検討すべきではなかろうか。しかしこの魅力的な問いをめぐる既存の成果は、実に乏しく数少ないと言わねばならない²⁾。

ところで明治の欧化政策とは、それまでの封建的な社会制度で育成された伝統文化に新しい視野を開き、西洋的な思考や造型を意図的に導入し模倣することによって、その後進性から脱却しようと努力した営為にはかならない。もとより、人間の生活習慣と深く密着して形成された「住宅庭園」も例外ではなく、急激な社会変動の下でその変容を示すことになる。しかしその変容のあり方は、新たに導入された近代都市装置としての都市公園と全く異なっていた。すなわち国家的プロジェクトの濃厚な公共施設は、緊迫する外交重圧を背景にいち早く洋風化の必要性に迫られたのに対して、私的な住宅庭園の場合、皇族や華族、政府官僚、財閥系の上流邸宅のごく少数を除き、大多数の一般国民に現れるのは次の大正時代まで待たねばならない。つまり洋風の別館・庭園を既存の和風に併設した上流邸宅の二重生活に対して、一般国民の多くはこれまで通りの生活スタイルが続けられていた。そして上流の和洋折衷式生活から完全に分かれて、新たな生活空間を創造する「近代化」への過渡期が大正時代であり、その近代的な大衆都市社会を基層から支える一般国民が求め始めた新しい理想生活においてこそ「造園のモダンデザイン」は誕生し得たと考える。

従って本研究では、多様な自由主義思潮の広まる大正期からナショナリズムの興隆する昭和初期にかけての「一般住宅庭園」に

着目し、田村剛(1890-1979)による庭園改善運動を主たる考察対象として取り上げ、その史的変遷の追跡から「造園のモダンティ」の一性格を照射したいと目論んでいる。なお本研究の射程は、次の具体的な三テーマによる枠組みで構成されることになる。

1. 田村剛のモダンデザイン思考と庭園改善運動(本稿)
2. 上原敬二の田村批判と庭園改善運動の限界(続稿)
3. ナショナリズムによる国民庭園への変容(続稿)

そこで以上の三テーマの内の1に相当する本稿の主旨は、まず田村剛によるモダンデザイン思考をその初期著作から抽出して検討し、さらにそれが大正9年発足の生活改善同盟会の参加を発端にして庭園改善運動の推進力へと大きく展開かつ結実していく動向を追跡して再評価することである。

2. 田村剛のモダンデザイン思考—日本近代造園史上の“セセッション”—

大正7年出版の田村剛による最初の著作『造園概論』が、冒頭の本多静六の「序」で「一科の学としての造園を樹立しようという一大企画の端緒である」と位置づけられたように、日本の「造園学」成立を宣言する重大な史的出来事であったことは、既に広く知られている。ただし、この目次構成を見ると、造園学の体系化の意図とともに、田村自身の斬新な問題提起が「第六章 時代思潮と造園」に組み込まれていたことを、ここで見落としてはならない。田村の問題提起とは、以下の痛烈な時代批判である。

「現代は混乱時代である。過渡の時代である。現代を代表するに足る思想がないと同様に、現代を代表する造園はない。現代は将来の造園を醸成せんとする努力の時代である。現代の造園家は欲する所の主義に従って、無二無三に努力奮闘しなければならぬ。それが鰐では将来の造園を大成する所以である。³⁾」

明治以降に導入された「洋風」造園と伝統的な「和風」との対立、さらに「和洋折衷」式の普及した大正期造園界の現状を、田村は「混乱時代」「過渡の時代」と批判し、現代の造園家にとって新様式の創造こそが最重要であると洞察していた。この田村の着想は、欧米の「図案や建築の新傾向たるセセッション式」⁴⁾ から強い影響を受けており、従ってそれに「共鳴」⁵⁾ する新傾向の表現様式を日本の造園界においても誕生させたいという切望を抱いていたのである。こうした田村の新たな表現性を希求する発言に同調したかのように、その翌年出版された上原敬二(1889-

*福井大学工学部建築建設工学科

「改善された庭園」(図-1, -2.)
生活改善同盟会案 (設計: 田村剛)

图-1 鳥瞰图

出典：『庭園』第4巻第6号 大正11年6月(1922)
平和記念東京博覧会にて実物展示された。
(会場：上野公園、期間：1922.3.10～7.31)

地割			
敷地	115 坪	基本：20坪	
建坪	25.5 坪	園地：5坪	
前庭	13.5 坪	後庭	48.2 坪
濡縁	3.1 坪	勝手廻	24.7 坪
運動場	6.6 坪	蔬菜園	6.2 坪
物干場	3.9 坪	養鶏場	3.4 坪
通路敷	21 坪	芝生	17 坪

図-2 平面図兼配置図 出典：『庭園』第5巻第1号(特集：庭園改善号) 大正12年1月(1923)
なお庭園に書き込まれた植物名等は、解説に従って書き加えた。

1981)の『住宅と庭園の設計』には、ほぼ同様な主張が見出される。

「近來個人生活の問題が深刻に考えられて來た時世には住宅にも色々な近代建築が応用され海外からは新しい設計意匠に参考となる住宅研究の書物が盛んに輸入されて來た。庭園の方も常によく考えて之れと相應する様に造り出されなければならぬ。何時でも息を切つて建築の進歩の後を追いかけて居る有様では何の余裕もなく到底良い考案は浮びそうにも見えない。時には一思いに建築の進歩を追いつき彼等に魁して時代に適應した新しい庭を作り茲に建築の進歩を待ち受ける位の發奮が欲しいと思う。」⁶⁾

このように第一次大戦直後の大正7年(1918)頃、所謂自由主義風潮と近代都市生活の興隆する時代情況にあつて、欧米のセセッション(分離派)等の初期モダニズム芸術運動を受容していた当時の日本の芸術界(絵画・彫刻・工芸・建築・文学等)と並び、造園界もその例外ではなかったことが、かかる田村と上原の新鋭な言説から読み取られ、そして従来の庭園様式とは全く異なる新たな表現性を創造し始めた動向も明瞭に確認されるのである。

さらにセセッションの芸術思潮の影響下にあると見なされた欧米の実用主義庭園を具体的な範例として、新たな設計方法の構築を即座に試みた田村は、翌大正8年に『実用主義の庭園』を出版した。この著作の執筆動機とは、モダンデザイン思考を標榜した造園の前衛的運動の開始にほかならず、正に「セセッション宣言文」と言える強烈な発言がはっきりと打ち出されていたのである。それは、以下のような文脈によって記述されていた。

「茲に主義として実用を標榜し、形式としては最も原始的な簡単な直線や直角や円等をのみ採用し、材料としては果樹や蔬菜や花卉や芝生や緑陰樹等をのみ使用した、小面積の庭園を思い着いて、従来我国に於ける理想的浪漫的な風景式庭園に対して、全然正反對の態度に出て、現実と実用との鮮明な革新の旗を翻したのが、この「実用主義の庭園」なのである。」⁷⁾

この中でも殊に、「最も原始的で簡単な直線や直角や円等をのみ採用」や「従来我国に於ける理想的浪漫的な風景式庭園に対して、全然正反對の態度に出て、革新の旗を翻した」という文脈には、過去の伝統から解放された典型的なモダンデザイン思考が彷彿しているのを読み取らざるをえない。つまりそれは、美的対象の造形要素を純粹幾何学形態に還元するという視覚革命と制作革命によって、これまでの硬直化した歴史主義による芸術世界を完全に覆して突破することを目指すモダニズムの基本的性格に通底する。従つて当時の田村は「造園学」の確立とともに、新時代傾向に合致した「新しい造園の様式表現」を探究していたのであり、この田村の新たなモダンデザイン思考こそ、日本近代造園史上の唯一の「セセッション」として再評価されるべきではなからうか。

3. 生活改善同盟会での田村剛の提案

ところで大正時代の自由主義風潮の広がりや近代都市社会の興隆のなかで、一般国民の生活空間を革新させる動きは、住文化の新たな改良へ集約されたと見てよい。つまり和洋折衷式二重生活を阻止し、一元化した理想生活スタイルとしての「文化住宅」⁸⁾を国民に広めることであった。例えば、日本最初の住宅メーカー「あめりか屋」を設立(1909)した橋口信助(1870-1928)が大正5年に「住宅改良会」を発足させており、さらにかかる時勢に応じて文部省が大正8年に「生活改善展覧会」を開催するなど、新たな生活環境の普及・定着を求める社会改革的運動が、多様な知識人層の参加も加わって、いっそう活発に展開され始めた。殊にここで注目される文部省主催の展覧会を契機にして、大正9年1月に発足した「生活改善同盟会」(文部省外郭団体)には、「衣食住」それぞれの近代的合理化の具体的指針を一般国民に広く定着させる目的で、各専門分野ごとに小委員会が設置された⁹⁾。その

住に関する「住宅改善調査委員会(会長：佐野利器・東大教授)」では、以下のような六大綱領を即時公表したのである(表-1)。

表-1 「住宅改善の方針」六大綱領(大正9年5月22日決定)
出典：日本建築学誌『建築雑誌』402号 p67(大正9年6月)

1. 本邦将来の住宅は漸次椅子式に改む可し。
2. 住宅の間取り設備は在来の接客本位を家族本位に改む可し。
3. 住宅の構造及び設備は虚飾を避け、衛生及び災害防止等の実用に重きを置く可し。
4. 庭園は在来の観賞本位に偏せず、保健防災等の実用に重きを置く可し。
5. 家具は簡單堅牢を旨とし、住宅の改善に準ず可し。
6. 大都市にありては地域の状況により、共同住宅(アパートメント)及び田園都市の設備を奨励す可し。

この中の第4項目は、当委員会での庭園部門特別委員を担当した田村剛による発案であり、これは先の著作(『造園概論』『実用主義の庭園』)に見られた斬新なモダンデザイン思考が受け継がれて反映したものであろう。「観賞本位に偏せず、・・・実用に重きを置く可し」とは、伝統への抵抗と近代的合目的性を有するモダンデザインの精髓に拠るものにほかならず、これに基づく庭園のモダンデザイン(実用主義庭園)が他の項目内容(建築・家具等)と連動して、新時代に相応しい生活様式の確立・普及を目指したものと理解される。こうして初期著作でモダンデザイン思考を表明した田村の着想は、生活改善同盟会への参加を機に、従来の伝統的な庭園様式の改善案である実用主義庭園を、現実的に具体化する活路を確実に見出すことへ到ったと考えられるのである。

4. 田村剛による庭園改善運動への具体化とその特色

生活改善同盟会・住宅改善調査委員会はさらに活動をすすめて、大正11年3月から上野公園を会場に開催する「平和記念東京博覧会」で、その六大綱領に基づく理想モデルを実物展示する企画を構想した。このとき、六大綱領の詳細検討から着手されたなかで、田村による庭園改善案の詳細内容を簡潔にまとめたものが表-2であり、そして実物展示された図面が図-1、2である。

表-2 庭園改善案(=実用主義庭園)の詳細内容
出典：生活改善同盟会誌『生活改善』5号 p1-16(大正11年8月)

1. 実用主義庭園の性格(庭園觀念の改造)
①主人・接客本位から家族本位へ
②観賞本位から実用本位へ
③特権階級から一般国民へ
④庭園と住宅の機能的結合
2. 実用主義庭園の機能・構成・設計・管理(具体的方法)
①機能
1. 実生活の利便性(玄関・勝手・物干・物置)
2. 空地の有効性(採光・通風・防災・衛生)
3. 戸外の居室性(快適な室内の延長)
4. 経済性(蔬菜・果樹・家畜)
5. 景観性(街路裝飾への配慮)
②構成
1. 地割(住宅の室内空間と結合した有効利用)
2. 規模(建坪の3倍以上)
3. 芝生(南面)と植込(日照調整)
4. 運動遊具(砂場・滑台・ブランコ)
5. 付属建築・家具(涼亭・壁泉・ベンチ)
6. 通路(前庭と後庭の連続性)
③設計
1. 家族構成とその実生活の尊重
④管理
1. 家族全員の主体的参加

これらの庭園改善案の詳細内容と図面には、田村のモダンデザイン思考によって構想された新しい庭園様式が総合的に結実して、いっそうリアルに具体化されたものである。

まず庭園改善のための詳細内容（表－2）を見ると、実用主義庭園の性格規定（理念）と具体的方法（実践）から総合的に考案されている。実用主義庭園の性格が、「一般国民」を対象として「家族本位」「実用本位」「庭園と住宅の機能的結合」を特徴とするのは、明らかに従来の封建的家族制度や生活様式の解体から近代社会生活へ移行する時代性を汲み取った上で、新しい庭園様式の創造が寄与する新時代への可能性を期待したからであろう。さらにこの庭園の性格を具体化した実践方法は、機能・構成・設計・管理にわたって提示され、それについては図面とも対照して次に触れてみたい。そこで理想モデルの図面（図－1，2）には、添付された解説に基づいて、地割の面積表と植栽のあり方を書き加え、田村の構想をより分かりやすく提示した。

この田村の設計による実用主義庭園の理想案は、全体的にみて、「文化住宅」と呼ばれた理想住宅（＝居間中心型）の間取りと機能的に結合した構成になっており、近代的な家族像のあり方や生活を実現する上で、最も相応しい建築と庭園の結合と考えられた。住宅の中心に位置する家族のための居間が南面に開かれ、その延長に濡縁を介して庭園空間が最も大きく広がり、また児童室に合わせたチューリップ花壇やブランコ、さらに北面にまとめられた台所・浴室等の近くには、物置や物干場、蔬菜園等が配置され、そしてこれら多様な庭園機能には、室内外からの観賞にも応じた造型形態を備えながら、直線苑路で一つに繋ぎ止められている。そして家族構成に根ざした実生活を尊重する設計態度は、さらに家族の主体的参加による管理維持にも十分に生かされている。

このような実用主義庭園の様式は、特権階級における曲線苑路のめぐる広大な芝庭を中心にした和洋折衷式や和風の観賞本位による池泉回遊式とは全く異なり、最も利便性・快適性・経済性を尊重した上で創造された新しい庭園のあり方である。さらにこの新たな庭園の芸術表現性とは、別称「直線式庭園」とも言われた

ように、直線分割構成によるモダニズム芸術（セセッション・キュビズム・構成主義等）の表現特色を、さまざまな制約によって通常拘束される造園分野の設計に最大限適用させた斬新な創造の産物であり、用と美の近代的総合によって創造しえた作品と捉えるべきであろう。多様な緑を通じて四季の情緒感を象徴的に表現する日本庭園の伝統性からこれを批判するのは容易いが、日本近代造園史上においてモダニズムとの直接対話から生まれた唯一の「庭園のモダンデザイン」として再評価されてよいと考える。

そのほか、近代都市社会の急激な成長の中で、文化住宅と実用主義庭園の一体化した理想の生活モデルが、一般国民大衆へ向けて具体的に提示されたことは、都市問題に対応した住宅・庭園のユニヴァーサルな「標準化」を促進させることにもなって、こうした社会性・商業性に通じる側面は、モダンデザインの一特色と理解できる。このようにして田村剛の具体化した庭園改善案＝実用主義庭園が、さらに庭園協会¹⁰⁾の機関誌『庭園』（大正12年1月：特集「庭園改善号」）に大きく掲載されるなど¹¹⁾、その活動は一つの「運動体」としての展開を秘めていたのである。

5. おわりに：まとめと今後の課題

以上のように本稿は、大正期における田村剛のモダンデザイン思考とその具体的な活動として結実した庭園改善運動の再評価を試みてきたわけである。この田村の働きは、日本近代造園史上における「セセッション」としての史的意義を有するとともに、さらにモダニズムとの直接対話によって庭園改善案＝実用主義庭園を創造したことで、全く新しい庭園様式の可能性を唯一開かした役割として重要視されるべきであると考えられる。

従って今後の課題は、冒頭で明記したように、上原敬二による田村への批判に合わせ、庭園改善運動における具体的な事例から、この運動の限界を突き止めること。さらに昭和初期のナショナリズム台頭によって、この庭園改善案＝実用主義庭園が国民庭園へと変容する実態を解き明かすこと。かかる本研究の射程をもって、日本における「造園のモダンティ」の一端を考え深めたい。

註および引用文献

- 1) 田村剛 (1918)：造園概論：成美堂，3
- 2) 管見に触れた主な参考文献を示す。
飛田範夫 (1985)：現代造園と作庭記：作庭記からみた造園：SD選書，鹿島出版会，30-42
上原敬二 (1987)：日本における洋風「庭園入門講座10 日本式庭園・各種庭園」：加島書店，96-99
西村公宏 (1989)：大正末期から昭和初期にかけての住宅競技設計における実用庭園：造園雑誌 52(5)
鈴木誠 (1998)：2.1 庭園デザインの系譜「ランドスケープ体系第3巻」：技報堂出版，47-52
近田哲也・大川三雄 (1999)：大正・昭和にかけての住宅庭園の近代化に関する研究：日本建築学会大会講演梗概集
笠原一人・古山正雄 (1999)：1910年代から1940年代前半までの日本における建築と庭園を巡る言説の特徴について：同上梗概集
なお欧米造園のモダンデザインについては、村上修一氏による最近年の研究成果が注目される。
3) 上掲書，208-209
4) 上掲書，201
5) 上掲書，201
6) 上原敬二 (1919)：住宅と庭園の設計：高山房，22
7) 田村剛 (1919)：実用主義の庭園：成美堂，3
8) 「文化住宅」とは、椅子式生活による居間中心型住宅を指す。
9) 生活改善同盟会に関する参考文献。
磯野さとみ (1991)：生活改善同盟会に関する一考察：昭和女子大学学苑 621号
中島邦 (1974)：大正期における生活改善同盟会：史艸 15号
内田青蔵 (1992)：日本の近代住宅：鹿島出版会
10) 大正7年8月発足の庭園協会は、「型にはまった旧思想を一擲し、時代に適応した新しい思想に宿った造園というものを普及したい」（設立主旨）という造園界の改革を目的として結成した団体であった。
11) その他、『建築雑誌』や『住宅』、『住宅研究』等にも掲載された。

Summary : In this paper, I tried to make clear “Tsuayoshi TAMURA's Thought of Modern Design and the Garden's Improvement Movement in Taisho Period”. The question of european modern design's adoptions also cropped up in Taisho and early Showa period critiques of the conventional Japanese style house-garden, and in statements of the Housing Improvment Movement (Jutaku Kaizen Undo). However by the late Taisho period, a few example of middle class residences with modern design style garden appeared in a model house shown at an exhibition by the Life Improvement Union (Seikatsu Kaizen Domeikai) and among other designs presented in magazines. In the european style homes with modern garden the living room had a focal position, both in terms of family life, and on the architectural ground plan. This study's objects are Dr. T. Tamura's early books and his activity in the Life Improvement Union. In conclusion, Dr. Tamura's texts and actions in the history of Japanese modern Landscape and Architecture includes european modern design's thought as “secession”.